

そんなことで旅団長が転任する時は、駅と駅の間八キロ位、住民が出て爆竹をたいて送ったということがありました。

日本と中国の間柄は、同種・同文であり、日本の道徳の根源は、儒教であり、日本人の思想の中には道德的なものがあります。我々日本人（特に戦前・戦中派）の心の中には、中国を侮る気持ちはなく、共に手を取り合って、アジアの再建に努力すべき同胞と思っていたのです。

私は、悲劇の第二十九師団の中であって、奇跡的に生き残った者であります。玉碎した多数の戦友の慰霊を欠かさず行なっている一人であります。

## テニアン島戦記

### 降伏せず生き抜く

京都府 小川 米治  
京都府 渡辺 達雄

海軍二三三設営隊という飛行場設営隊の、軍属・工員の軍事訓練指導と隊の庶務担当者の小川米治氏と、陸軍部隊の隊衛戦闘部隊の渡辺達雄氏のお二人は、陸・海、軍人・軍属の違いはあったが、京都府の綾部市と宮津市出身と同郷の土、共にテニアン島で任務につき、玉碎せず、降伏せず、それぞれの立場で生き抜いた奇跡の人生、奇遇の縁で相互の知られざる事実を語り合う体験談である。 聴取者 星 澤 實

### 海軍飛行場設営隊

私（小川）は、ウ第二三三部隊という設営隊に所属していた。約三百五十人の土工を主力とした隊である

ので、その隊員の軍事訓練をするのが主たる役目でした。私の担当隊員は約四十人で、その班長をしていたのである。

部隊長は林海軍少佐、私は第二中隊の庶務係、従って、第二中隊の書類は私が全部持っていた。部隊は第二二二部隊から三百〜三百五十人が我が部隊に来て、残った人はニューギニアで玉砕してしまっただけです。

我が部隊の任務は、テナアン島、マルボのそばへ、南洋興発のトロッコの線を使って第三の飛行場の建設であった。そこに、陸軍の人達（第五十連隊）が応援に来た。

その中に、テナアン生き残りの人、綾部市の渡辺達雄さんがおられ、現在に至るもお付き合いをしている。また、ご自分の戦記も書かれている（「平和の礎」にも掲載）。

飛行場がやっと完成したら、米空軍の爆撃で滑走路などに大きな穴をあけられる。今度はその穴を埋めるのが仕事となって来た。戦後聞くとところによると、例

の「ガダルカナル」でも、日本軍の飛行場建設が終わったら米軍が上陸し、結局、日本軍は大きな犠牲を払いながら撤退をしたという。

テナアンでも、日本軍が一度も使用しないうちに機動部隊の攻撃が続けられ、米軍が上陸、その間、十日間位、散散砲爆撃が続けられる。サイパン島に上陸の米軍は、日本軍の砲台を使って、テナアンを砲撃したとも聞いている。

米軍は、日本軍の滑走路ができたなら、砲・爆撃で穴をあける。滑走路ができるまでは上陸をしなかった米軍は、サイパンとグアム島を攻略し、その後、最後にテナアン上陸であった。

我々はジャングルの中で米軍を見ていたが、上陸するとすぐブルドーザーなどの大きな建設機械を使って滑走路を大きくした。我々日本軍は、南洋興発のトロッコを使ったり、国産の四トン・トラックで土を運ぶ。米軍は大きなトラックとブルドーザーで、見る見ると大きな滑走路を作ってしまった。

我々は、米軍の体力（機械力）と物量で負けた。こ

れは、敗戦後降伏して、アメリカ本土へ連れて行かれ、大きな石油タンク、機械、自動車も全然違うことを見せつけられた。日本軍の設営部隊は、ほとんど戦死してしまった。その生き残りの我々を、米本土へ連れて行き、力の差を我々に見せつけ「負けた」という認識をさせたのかもしれない。

一発の爆弾により開けられた穴の直径は約二〇メートル位、大きな石がバラバラと落ちて来て、逃げるとか隠れることはできなかった。自分の意志で走ることはできず、ただ運を任せるより仕方がなかった。我が隊の曹長は、大きな石が当たり即死した。人間の格好も残っていない。無惨なものでした。

渡辺達雄さんは、戦後話をしてくれた。「テナアン島の兵力は少なかった。松本の歩兵第五十連隊の二個大隊位で、私の『誉』部隊（第四十三師団）の第一三五連隊一個大隊位だった」。その悲惨さは、米軍の写真を見れば分かる。また、玉砕後、死んだ日本兵の銃はあっても、弾丸を二十発持っていた人はいない。我々

に支給された弾丸は少なかった。

敗残兵になってから弾を探したが無かった。米軍の銃を取るのには修理工場へ盗みに入り、手さぐりで銃を持ち出したり、トラックの中にある銃を取った。こちらから射つと逃げるので、夜、銃や食糧を獲りに侵入した。

マルボの井戸は田圃みたいな所で、この写真にある日本人の（戦没者）墓がある。南洋興発の邦人の墓である。老若男女も居る。軍と共に殉じた人々の墓である。

長野県戦没者の慰霊に行った時、住吉神社の鳥居があったが、あそこが我々の最後の地だった。玉砕後、戦没者の遺骨は米軍のブルドーザーで集められた。各県の慰霊団は現在もテナアンを訪問している。遺骨ははまだ洞窟に残っているという。

#### テナアン島の玉砕状況

今のテナアンの状況と、昭和十九（一九四四）年玉砕当時の状況では随分様子が変わっている。住吉神社

の鳥居の所で、最後の軍人六人いて、そのうち二人やられ、数少ない同志によって、二、三カ月一緒に行動した。しかし、病死した者もいて最後は私一人になった。

人が来れば現地人かなと思う。向こうで動く者がいると、敵か味方が分からないから警戒する。合言葉があった。「必勝」「信念」という合言葉である。

敵が上陸してから使うためだったが、私（渡辺）は人と会ったことがなかったから使えなかった。一度、ドカ、ドカとやられたらそこへは行かない。私は、ドカ、ドカとやられて五〇メートル先の中隊長の所へも行けなかった。

特に夜では一メートル先が分からない。人が居るか否か、そこへ行けるのか、行けないのか分からない。隊は、一個小隊以上いけば最大で、大体が戦死してしまっただけだ。

敵が上陸した所で応戦したが、やられていて可哀想だが応援に行けない。大隊長自身が自決してしまっただけだ。私は「日の出陣地」で敵の集中砲火を受け前進

できず、それから先へ行かれないで引き返したので助かったのです。

守備隊は飛行場あたりに集結していたと思う。敵が上陸したが、我が兵力は少なかった。沖縄の人、金沢の人もいたが、民間人が多くいた。軍人はいいのだが、民間人は気の毒でした。可哀想でした。

#### 〈小川〉

住民の人は、最後は気の毒だった。「銃を譲ってくれ」と言われても弾丸が無い。自決するより「誰か自分を殺してくれ」と頼んでいた。「子供より先に自分を殺してくれ」と言う人も多かった。島の北方に、民間人が多かったので、敵が上陸して来た時、人々は南の方へ移動していったのでした。南の海岸では、米軍が日本語で放送していた。足をやられて動けず、木に登ろうとしたが登れない。手も足も栄養失調というか思うように動けない。何か食べねばと思ひ、芋の葉を口に入れたがアクが強くて食べられない。「これが栄養失調か」と思ひ、何か食べねばと思ひ、米軍の食糧

を盗んで食べた。

米軍は、ジャングルの中に入って来ない。「ストッブ」と標識がしてある。入れば、我々敗残兵に反撃される。放っておけば死ぬだろうからと、そのまま放っておいたのであろう。

ジャングルの中に、電線に空き缶がぶら下げてある。度胸のある者は前に行き、「ガラガラ」と鳴ったら、前の者は早く逃げ、後の者が射られる。喘息持ちの者は、咳き込むために敵に発見され、射られて死んでしまった。

今になって思うこと

戦争が終わって、今になって思うことだが、当時としては当然、軍の中の軍人、軍属として、心の底にそんな考えは潜んでいたのだろうが、口に出しても言えないことだが、今になって思うことを申してみる。

テニアン島の玉砕について、生き残った私は今になって思うことだが、サイパンの司令官は、とても太刀打ちできぬと思ったら、米軍の司令官に申し込んで、

「自分はどうなってもいいから、この部隊と住民の生命を保証してくれ」と要求できなかったのかなと思ふ。

昔の武士道からいうと「一人残らず自決したり、死んでしまつては、何も残らず意味がない」。私に言わせたら、武士道というものは、「軍使を出して、非戦闘員である一般住民や非戦闘員たる軍属の生命を保証してくれ、その責任は私がとる」と言う所に司令官たる者の値打ちがあるのではないか。何万の者を殺すことが日本武士道だと思つているのが日本の教育なのか。日本が滅亡して、大義がどこにあるのか、しかしあの時代では、そのようなことはできなかったでしょうか。

私は、戦争終了後降伏し、アメリカへ連れて行かれて、アメリカの物量とか工業力を見せつけられた。ハワイで、太平洋艦隊は撃滅されたのに、米国には大西洋艦隊があり、沈んだ軍艦をそのまましておいても、新しい艦を建造していった。

日本は、ミッドウェーで、連合艦隊は再編できな

かった。アメリカは三年経ったら、倍以上の艦隊が復活していたのです。日本の経済力とアメリカでは経済力が違っていた。

テニアンでの戦闘の話だが、日本は、一発で当てようとするが、アメリカは、初めの弾が当たらなければ次の五発で当てよう。パンパンと、ドド……ドの違いは実戦で体験しました。日本は、「井の中の蛙」だと思った。これでは助かりようがない。日米の戦力の差を、まざまざと感じさせられ、戦友はどんどん死んで行った。

忘れられない人タケさん

このような戦の後、負傷し、四十日間洞窟の中で動けなくなっていた。薬は無い包帯も無い。食物も水も無い。その間に、私に物を運んで来た男がいる。「タケ」「タケ」と呼んでいた若い兵隊（海軍）だった。正式な姓名は知らない。「竹田」「竹山」「武井」……。「タケ」と呼んでいた。

生家は広島だと聞き、母と二人きりだったようである。二十歳を出たばかりの志願兵だったのか？ その後、動けるようになってからは、米軍の洗濯物を盗んで包帯として使うようになった。とにかく、命の恩人なので、戦後帰ってから捜そうとしたが、広島は原爆でやられ、母親の人も市内なのか、県内の人なのか分からず、雲を掴むようなもので、戦後既に五十余年経ってしまった。

敗残兵になってから同じ洞窟に前田少尉という加賀の殿様の一族の若い将校が居た。ところが、前田少尉は海軍、私は年配（大正元年生まれ）の陸軍上等兵である。少尉は上官だが、陸と海との違いからか、前田少尉の指揮下にいるのは不満であった。前田少尉は人格者であったと思うが、その配下の下士官が、何かと我々を、働き蜂の如く使っている。「小川と誰々は、今日は、何々を取って来い」と命令する。前田少尉の食物や何かを獲って来いと言うので、不満ではあったが下において、部下の働きをしていた。

私はそれが不満だったので、私と、もう一人の海軍

の人と、「タケ」でこの洞窟を出ようと思っていた。

「タケ」は将校の命令に従わねばならんと思ったのだろう。「小川さん、私は残ります」と、言って残った。

私はなぜ、前田少尉の洞窟から出たかという点、原因もあつた。昭和十九年八月、玉砕してから負傷、完全に癒えるまで動けなかったことは前にも申ししたが「タケ」は、前田グループに内緒で、私の所へ、バナナや砂糖や何かを持ってきてくれた恩人である。ところが前田少尉の部下のB兵曹は、私の所へ来て「負傷だから仕方ないが、物は前田少尉の所へ持って来い」と、動けぬ私に言ったことがある。このようなことから、洞内から出て行く気持ちを持つようになったのである。

しかし「タケ」のことは忘れることはできない。「タケ」のその後のことは、前田少尉に聞けば分かるのかしれぬが、内地へ帰ってから「尋ね人」の欄に出してみたが、不明のままである。厚生省に聞いても、プライバシーの問題は調査しても個人には知らせないようだ。

広島出身者で、昭和二十一年、ハワイかサイパンから帰国しているはずである。昭和二十二年には、サイパンもテニアンも皆復員していて内地に帰ったのであるから、何とか捜したいと日夜思っているのである。階級は「上等水兵」であると思うのであるが、生きていれば、何かして上げたいと、九十歳になる私の願いである。

#### テニアン脱出計画

私は部隊が全滅、指揮系統が無くなったので、どこかへ脱出しようと思った。筏に乗って、狭いテニアンから脱出しようと考えた。帆のある船があるか、米軍艦の中で盗むことはできぬ、近寄ることもできない。筏に乗って脱出しようと考えた期間は永く、悲惨でし

た。ようやく、小川、タケ、広野、今田の他に二人で出発した。四日目に米軍の戦闘機グラマンに発見され銃撃された。そのため四人は戦死し、私と「タケ」だけが生き残った。しかし、ある島に着いたので九州かと

思ったら、元のテニアン島であった。潮の流れに乗って、テニアンに戻ってしまった。しかも、同乗者のうち二人だけ生き残りであった。

今度は一週間も二週間も期間をおいて資材を集めた。材木を日米の電話線を七、八本まとめ、ワイヤーにして三段に縛った。雨の降ることも、波の来ることも考えず、随分と苦勞した。水を入れる缶六個に水を入れ、食料は大事に保留してあったあるだけの米を全部炒って缶に入れ、キチッと蓋をした（一斗位か）。

生きる可能性より死ぬ可能性の方が高い筏での準備であった。どこかへ着いて、そこが無人島では食べ物がないと生きて行けないからである。随分、無茶な計画ではあったが、何とか、ここを脱出しようと懸命であった。

テニアン本島には、何とか食べる物はある。砂糖黍はある。筏の構想はいいが、帆柱・櫂はシャモジの長い物、これが、何ともできない。潮の流れでどこかへ着くだろう。せめて、サイパンに着けば、テニアンより大きいから何とかなるだろう。こんな切羽詰まった

心境でした。

しかし、この無謀な計画は最後まで実施をしても不成功に終わり、我々は、狭いテニアン島で、米軍の日をかすめながら生き抜いていったのである。もちろん、降伏の機会があったが、殺されても降伏する気持ちは無かった。また、どこまで生き抜けるか、明日はどうなるのかの不安は頭から抜けなかった。あるいは、ただただ生き抜くという、人間本来の、というより生物本来の性質で生き抜けたかも知れない。しかし、それには、奇跡がなければ実現しなかったのかも知れない。

#### 降伏の勧告

日本では捕虜となるより「殺せ」と言う。日本人は世間が狭いというのか、降伏の知らせは米軍から言われた。教員とか僧侶が知らせて歩いてきた。敗戦ということは我々には理解できない。恐らく謀略であろうと考えていたからだ。私は岩の上から見ているが、米軍がなぜ我々を射たぬのか不思議に思った。

そのうち、「日本人は泳げんのか」「日本海軍は泳げんのか」と叫ぶ者もいた。しかし、誰一人として行かなかった。しかし、前にも言ったように、米軍は、日本人がいるのになぜ射たぬのか疑問を持った。また、僧侶や先生が「○○さん、子供が待っているから来なさい」と叫んでいるのも聞こえた。

敗戦と決まった時、日本軍の少尉が言った。「それに異議ある者は自決せよ」と。しかし、「捕虜になる」とは言わなかった。そのうちに「おい、小川君」と私を名指して呼びかけた者がいた。「日本軍は負けだ。降伏せよ、タバコや燐寸を持って来た」と言う。仲間が捕虜になったというので出ていった。仲間はタバコと燐寸をくれる。私は真裸になり、パンツもくれた「殺すなら早く殺せ」と言う、将校が我々兵隊に、タバコの火をつけてくれた。そのうち、仲間が出てくるようになった。

食事は、パン二枚に、オレンジ一個、我々はパン一袋無いと腹は満たされない。米を持って、それに乾燥野菜・粉味噌・醬油などを持って戦争に行ったが、

「米軍はパンだけでよいのかな、案外少食なのか」と思ったりした。

しかし、私はテニアンで米軍の缶詰や携帯食を盗んで助かった。段ボール二〇ケース詰めて土の中に埋めておいた。

我々は敗残兵になって、日本軍の食糧が無く、米軍の食糧を獲って助かった。犬や豚も殺して食べた。一人で生きるのは大変だが、隠れたり、逃げるには一人の方が安心だった。私は方向音痴だったが、夜間目標をよく覚えておいて、上へ逃げるより、下に逃げる方が安全であることも体験で知った。考えてもみなかった、敗戦、捕虜となり、奇跡の連続なしでは生きて行けなかった。

米軍からももらった一枚のパンとオレンジを食べながら走馬灯のように、いろいろなことが頭を横切っていて、生きていることを実感したのである。

米軍によって、米本土、ハワイへ行き、少佐の官舎へ使役に行き、作業として絵を書いた。捕虜になれば国際法で処置されるという。日当として二十五セント

の賃金をもらった。これが捕虜の待遇であることを知った。

【解説】—テニアン戦とは—

テニアン島の兵力

テニアンの陸軍及び海軍部隊の編成は次表のごとくであり、陸軍四、〇〇〇一人、海軍四、一一〇人、計八、一一一人であった。

【陸軍—テニアン島関係部隊人員一覧表】

〈部隊名 部隊長名 人員〉

歩兵第五十連隊

本部 大佐 緒方 敬志 六〇

第一大隊 大尉 松田 和男 五七五

第二大隊 大尉 神山 新七 五七二

第三大隊 大尉 山本 好江 五七五

砲兵大隊 大尉 平松 龍彦 三六〇

(昭和十九年六月二十六日 甲斐克之少佐と交代)

甲斐少佐は七月三日 連隊本部付)

工兵中隊 中尉 天野 忠一 一六九

通信中隊 中尉 林 亨 一四一

補給中隊 中尉 野崎 健司 二〇〇

衛生隊 中尉 鳴澤 正明 一三〇

速射砲小隊 少尉 大谷 元 四二

小計 二、八二四

(ロタ島への先発者一〇三人を除いた数字かどうかは不明)

歩兵第一三五連隊第一大隊 大尉 和泉 文三 九五〇

歩兵第十八連隊戦車中隊 中尉 鹿村 一男 六四

第三十一軍築城班 大尉 比留間正司 六〇

独立自動車第二六四中隊第三小隊 軍医中佐 稲田 壽郎 四〇

第二十九師団野戦病院 配属部隊 小計 一、一七七

陸軍合計 四、〇〇一

【海軍—海軍関係部隊人員一覽表】

部隊長名	部隊長名	人員
第五十六警備隊	大佐 大塚 吾一	九五〇
第八十二防空隊	中尉 田中吉太郎	二〇〇
第八十三防空隊	中尉 田中 明喜	二五〇
第二三三設営隊	少佐 林 邦夫	六〇〇
第一航空艦隊	中將 角田 覚治	二〇〇
第一二一航空隊	中佐 岩尾 正次	四六〇
第三二一航空隊	中佐 久保徳太郎	〃
第三四三航空隊	中佐 竹中 正雄	〃
第五二三航空隊	中佐 和田鐵二郎	〃
第七六一航空隊	中佐 松本 眞實	〃
第一〇二一航空隊	大佐 栗野厚仁志	〃
第十九魚雷網調整班		二〇〇
航空部隊通過者		二〇〇
第二十三航空戦隊関係		四五〇
その他建設要員(設営隊)		八〇〇
海軍合計		四、一一〇
陸海軍総計		八、一一一

【航空部隊】

六月中旬にはテニアン島の航空部隊は、概ね次のとおりとなった。

- 第一二一空(薙) 司令 岩尾正次中佐以下 偵察機 三、艦爆 二
  - 第三二一空(鶏)の 一部と基地員 夜戦 二一
  - 第三四三空(隼)の 一部と基地員 零戦 八
  - 第五二三空(鷹)の 一部と基地員 艦爆 一〇
  - 第七六一空(龍)の 一部と基地員 一式陸攻 六
  - 第一〇二一空(鳩)司令 栗野厚仁志大佐以下 遠爆(深山) 一、陸攻撃 二、ダグラス 六
- 以上の他第十一航空艦隊、及び 第十四航空艦隊の所属輸送機約一二機

在留邦人の内地引揚げと軍への協力

昭和十八年末ごろから婦女子と十四歳以下六十歳以上の防衛生産に直接必要なものの内地引揚げ方針が立てられたが、具体策は確定せず、引揚げ時期も未定のままだった。しかし二月下旬の初空襲後、漸く引揚

げが軌道に乗り始めた矢先、三月上旬引揚者を乗せた「あめりか丸」の遭難、六月上旬「千代丸」「白山丸」の沈没等もあって、在留邦人の中には帰国を諦め、最後まで同島に踏みとどまって戦力の増強に挺身するという人も多かった。内地引き揚げた人員は約二、三〇〇人で、七月下旬米軍進攻時には、約一五、七〇〇人（うち朝鮮人二、七〇〇人）の邦人が在島していた。

テニアンには記述のように二月中旬ごろから第二三三海軍設営隊を中心として、第二、第三海軍設営隊を中心として、第二、第三飛行場の造成が開始され、多数の在留邦人が労力奉仕を行なった。また、在留邦人の協力を受けて、ハゴイ第一基地南側に戦闘機用の滑走路建設工事も始められた。

#### テニアン島の末期

七月十八日には、サイバン玉砕の大本営発表が行われ、放送を聞いたテニアン将兵は、一般邦人と共に、言い知れぬ不安に沈んだ。

テニアン守備隊は、いよいよ米軍の上陸が切迫して

いることを感じ、陸海軍合同作戦会議を実施し、陸上指揮は陸軍守備隊長・緒方大佐が執ることを確認、海軍部隊も指揮下に入ることを角田司令長官から命ぜられた。

在島の海軍航空部隊は、既に全飛行機を失っていたので、航空部隊搭乗員、基地員、設営隊その他の人員で陸戦隊を組織し、第五十九警備隊と共に、陸軍部隊を骨幹として全島一丸となり、テニアンの確保に邁進することとなった。

主な海軍部隊は次のごとくである。

第五十六警備隊、第一二一・第三四三航空隊、  
第一航空艦隊司令部・第一〇二二航空隊、第十一・  
第十四航空艦隊の部隊、第七六一・第五二三航空  
隊、第三二一航空隊、設営隊。

テニアンの在郷軍人も召集され、南洋庁のテニアン出張所員は警防団を組織し、南洋興発会社では、精糖所長統轄の下に、警防団を組織して、軍に協力する態勢をとった。

テニアン島一般邦人青壮年の活躍は涙ぐましいもの

があり、在郷軍人はもちろんのこと、警防団あるいは青年団として、米軍上陸以来よく軍に協力、戦闘に従事した。七月二十八日テニアン陸海軍最高指揮官は、陸海軍両大臣並びに大東亜大臣宛に次の電報を發して、その勇戦敢闘を報告した。

一 支庁及び民間幹部指導ノ下ニ在「テニアン」島邦人一五、〇〇〇人中十六歳ヨリ四十五歳ノモノ全員三、五〇〇人義勇隊ニ編成シ、軍ニ全幅協力中

残余ハ老幼婦女子ニテソノ大部ハ既ニ「カロリナス」地区ヨリ避難シツツアリ

二 義勇隊ハ六個中隊ニ編成シ軍各隊ニ配属 奮戦敢闘シツツアリテ皇国人トシテノ伝統ヲ遺憾ナク

発揮シツツアリ

三 支所長代理在留邦人幹部ヲ合ワセ 老幼婦女子ハ集結ノ上爆薬ニヨリ処決スナオ支所長ハ敵「サイパン」上陸前ニ「サイパン」ニ出張未帰還

この電報はサイパン、テニアンの戦闘期間中、軍が公式に一般邦人に関して報じた唯一のものであった。

テニアン島日本軍の玉碎

マルボ井戸の水源も遂に米軍の手に落ち、米軍はわが最後の抵抗陣地に突入する態勢となった。

緒方連隊長は、以下の戦況から既にテニアン戦局の大勢も決したと判断し、同日夜大本営およびグアムの小幡軍司令官に宛て、最後の報告を次のように電報した。

「守備隊ハ陸海軍協同一致敢闘セシモ将兵相次イデ倒レ 最後ノ処置ヲ終了シ 最高指揮官ヲ先頭ニ近ク最後ノ突撃ヲ敢行セントス 部下將兵ノ勇戦ニモ拘ワラズ小官ノ指揮拙劣ナリシタメ「テニアン」守備ノ任務ヲ果タシ得ズ 光輝アル軍旗ト歴史アル陛下ノ連隊ト共ニ玉碎セントス」

七月三十日夜から三十一日夕刻に至る戦闘は、マル

ボ盆地から山腹ジャングル地帯にかけて行われ、激しい攻防戦が各所に展開し壮絶を極めた。この付近は長く南洋開発関係者が待機し、サイパン営業所庶務の若松武司担任が専修学校在校生及び卒業生を集結指揮したところであるが、その敢闘ぶりは将兵驚嘆の的だった。糧食弾薬の運搬はもちろん、伝令・誘導を率先申し出で、その勇敢さは百戦錬磨の勇士でさえ瞠目していた。若松担任は若松清司陸軍少将の令息であるが、時既に玉砕の決定的なことを悟り従容自決した。

テナアン島最後の突撃も、戦果を収めることなく終息し、守備隊の組織的戦闘は、八月三日夜明けと共に終った。

カロリナス東側のジャングル地帯には、民間人と指揮官のいない兵がそここの洞窟や岩蔭に集まっていたが既に戦闘力はなかった。

どこからともなく「食糧を確保して長期戦に移れ」とか「天命を保有せよ」等、出所不明の命令が伝わり、部隊は離散していった。

テナアンの戦いは九日間で終った。この間日本軍の

戦死は五千人以上で、残り四千人が、以後の遊撃戦に、あるいは戦意を失って洞窟をさ迷うこととなった。一方、米軍は三八九人の戦死と一、八一六人の負傷者を出した。また、この頃までの民間人の戦没者は、既に三千人を越え、崖から身を投ずるもの、手榴弾で自決するものも多かった。

生存者は、数人から数十人の集団となって、米軍の施設や飛行機、自動車を破壊したり、人員を襲撃するなど遊撃戦を続けながら、友軍のテナアン奪回の日を期待したが、米軍の掃討戦の激化と食糧の欠乏によって、次第に損耗していった。

このように、所謂玉砕による状況を、防衛庁防衛研究所戦史部著の『戦史叢書』は記載している。

「自決せず、降伏せず」テナアン島で戦った人々がいた。その人たちは、何と言う隊で、どのような人々であったか？ 聞き取り、証言者である小川氏が持参された名簿について、

「ここに、第二三二設営隊、一部ウ二三三編入名簿

があります。テニアン玉砕部隊、全一、〇六三人であります。この資料は、表紙裏側に、その入手、保管の理由を次のように書きつけて置きました。

「本書は原簿をコピーした物なり。原簿は昭和十八年第二三三設営隊（舞鶴市溝尻）へ徴用され当該の庶務の仕事に当たられた、富津市本町・加藤純一郎氏が、終戦と同時に解散、所持しておられた物を、小川米治がコピー再生した世界に只一卷の重要資料である。

加藤氏 生年月日 明治四十二年三月十日」

加藤氏と小川米治は何ら過去に関係はないのであるが、市の老人大学に志望、学生である二人は、偶然会話の中より、第二三三隊、第二三三隊の話となり、加藤氏の手元に本書のあるを知り、四十五年ぶりに私と同隊の一部の住所を知り得たのである。

宮津市惣、小川米治は昭和十八年十月、第二三三設営隊に徴用され、同隊三五〇人に対する各個訓練をする要員であった。

昭和十九年三月、ウ二三三部隊テニアン飛行場新設

任務で渡島増員のため、二三二部隊から転入した一三七人が出発前に編入になり、同年七月末の玉砕に至る。私、小川庶務は、玉砕後も生存、隊員二中隊員の名簿を二カ月所持し、書類の必要性を失し、地下に埋め捨てり、故に現在明示できる氏名は、この百余人の中に生還された方が何人あるか調査困難であり、身近だけでも調べます。

記 二三二隊員 一、〇六三人

二三三隊員 四五〇人

玉砕四十八年目に、岐阜県マリアナ慰霊奉賛会員六〇人が、平成三年五月二十一日―二十五日、渡島に、同会外の鳥取から五人と、私（小川）参加奉賛したのである。

大津 二三三隊は、福井、滋賀、石川、京都から徴用され、舞鶴 二三三隊は、ほとんど全国（北海道を除く）出身者なり。

元軍訓練指導員 ウ二三三設営隊

第二中隊 庶務 小川米治 大正一年九月九日

(\*「ウ」はうち南洋の記号)

海軍加算調書より

第二三三設営隊

昭和十八年十月十日～十一月二十八日

内地 戦務 丁 一月(昭和十八年十月十日編

成)

昭和十八年十一月二十九日 舞鶴 二十年九月二

日終期

南西方面 専務 甲 三月

後発隊へ昭和十九年一月二十二日舞鶴発

第二三三設営隊

昭和十九年三月四日～七月十七日

内地 戦務 丁 一月(昭和十九年三月四日編

成)

昭和十九年七月十八日 舞鶴 十月十五日終期

南洋群島 職務 甲 三月(昭和十九年十月解

隊)とある。解隊とは玉砕である。

設営隊名簿は、イロハ順の氏名と中隊別名簿、職種、電符・番号・生年月日、入庁・転備・所属・留守担当者、住所・氏名・統柄等が記入された詳細なものである。

職種には、記録員・製図員・土工・鳶職・家屋大工・機械修理工・自動車運転手・木工員・未経験・石工・潜水工・潜水工補助・水道工・左官・煉瓦工・電機工・機械運転工・機械組立工・溶接工・鋳物工・旋盤工・板金工・鍛冶工・機修工・製缶工・仕上工・舟夫・烹炊等々多種であるが、大多数は土工であった。

(応召転出もある)